



NEWS ECO

シブヤパイピング工業株式会社

TEL 052-221-6911 FAX052-201-9681

URL <http://www.shibuya-p.com>



シブヤの「サクラ」は名古屋気象台の開花宣言に遅れるこ2日と、3月24日に開花しました。

4月1日には満開の桜の下で新入社員を迎え、午後からは例年の通り、「経営計画」が社長より示され、新年度がはじまりました。

71期も、ISO活動が仕事を進めるうえでの「基本ツール」であることを再認識し、新入社員とともに新年度のスタートを切りましょう。

《 内部監査 》 3月23・24日、4月10日の3日間で内部監査が行われました。

内部監査へのご協力ありがとうございました。今回の監査より、年1回の内部監査となりました。各部門署とも監査内容を踏まえ、1年間に渡る、実効性のある計画と活動をお願いします。今年度より、中間での内部監査が行われないことから、自部門署で逐次、行動評価と改善を確実に進めて行くことが大切です。目標に対して適切な時期での評価、改善を今まで以上に確実に実行してください。

ISOは経営そのもの

2月26日付・日刊工業新聞に掲載された、日本経営士会・永井守氏の記事を紹介します。記事の中で永井守氏は、「業務分担の明確化」が問題を解決し、利益をもたらし、品質向上、利益拡大につながるとしています。品質を向上させ、無駄を無くすことは利益向上とともに環境への負荷低減にもつながります。

審査・監査のためのISO活動にならないための参考にしてください。

ISOは経営そのもの

時々、ISOを取得するだけで当社は満足していると言われる方がいる。ある業界ではISOを取得しているだけで請負単価が上がるという人もいます。また、ISOの管理体制とモノづくりの品質管理システムは別で、二つの規定で運用していると言っ方もいる。筆者は1970年(昭和45年)から品質管理を担当し、そのころ日本の品質管理の父と言われた石川馨先生がTQC、TQMを唱え現存する

「日本品質管理賞」が949が設立された。品質マネジメントシステムの実効性を表彰している。読者の皆様がご存知のデミング賞は51年に設立。そのデミング賞を手に米国で87年マルコム・ボールドリッジ賞を設立。その後94年ISO9001が設立され、米国ビッグスリー共通の要求事項のQS-9000と集まされ、ISO/TS16949が設立された。

品質を向上させ、売上・利益を上げるための品質マネジメントシステムだ。ところが、冒頭のよう形式のみの管理に徹している企業がある。ISO事務局員を置き、目標管理・内部監査・マネジメントレビュー・文書管理など管理工数を発生させているが、品質を向上させる活動を実施せず、利益を上げるための活動に終わる。この業務分担を明確にする。問題が解決し、利益も上がり

ISOも取得可能となる。業務分担が明確になると、顧客要求仕様を設計部門が図面を作成し、作成された図面を製造部がデザインレビューを実施。量産評価分析を品質管理部が実施する部門間の情報処理内容を明確にした品質保証体系図を作成する。

これが品質マネジメントシステムの全容で、企業の利益拡大・会社存続するために何が必要で、何を実行するかが、それにはどのような組織を構築するか、至極当たり前の作業がISOだ。

(日本経営士会・永井守、0422-53-2979)

経営士の提言

品質向上・利益拡大に全力／業務分担明確化実効性高める

《 生物多様性の保全 》

私たちの暮らしのさまざまな場面で深くかかわってきた、生物多様性。全ての生命の基盤ともいえる、この生物多様性を保全するために、何が必要とされているのでしょうか。今、私たちにできることは？(参考資料:WWFジャパン特集サイト)

自然環境を知り、破壊から守る

どこに、どのような生物が、どのくらい生きているのかを知り、人の利用や開発などを制限することは、生物多様性を守る上で、有効な手段の一つでしょう。特に多様な生物が多く生息する場所が明らかになれば、その場所を優先的に保護区の対象に設定し、効率的に生物多様性を守る事ができます。

また、開発計画の候補地に、どのような生物種がいるのかが分かれば、重要な生息地や希少な種が生息する地域を、避けることも可能になります。さらに、開発に際しても、これらの生物の生存に、極力配慮した開発計画を立て、実践することも可能となります。

人は一切の自然破壊を行わずに暮らすことはできません。ですから、自然のこと、生物多様性のことをよく知り、人間も生物の一員という謙虚な心を忘れずに、極力自然環境の保全に努めることが大切なのです。

持続可能な資源利用を進める

建築資材や紙資源としての木材や、水産物としての魚や貝などの多くは、生物多様性の中で生み出されています。そして、これらを利用しながら、人間は生きています。

私たちが生きていくためには、生物多様性を利用しながら保護するという、「持続可能な資源利用」を行わなければなりません。そのためには、生態系の状況や、現地の社会的、経済的な状況などをよく知り、人々が暮らしの中で、生態系を守りつつ利用していけるような、社会的な仕組みを作ることが必要です。

たとえば漁業の場合、漁獲量を魚の量と繁殖率を調べて、定めれば、その魚が絶滅する可能性を下げる事が出来ます。木材の場合も、樹木の育つスピードや、森の環境全体におよぶ影響を考えながら伐採を行うことが必要です。

生物の持つ生産力を持続可能なレベルで資源として利用することで、私たちは自然の恵みを利用しながら、暮らしていくことができるのです。

私たちにできること

私たちが、もっとよく生物多様性について知り、自分と自然とのつながりを考えるなら、人と自然の共生に向けた取り組みは、大きく前進します。まずは普段の生活で利用している製品が、自然を壊して作られたり、加工のプロセスで環境を汚染したりしていたら、あなたはどうしますか。その製品の利用を考えるとしよう。

林業や漁業が、環境保全と資源を使い尽くすことのないよう配慮して生産した木材やシーフードを消費者として選んで買うことも、生物多様性を保全する手段の一つです。こうした製品については森林管理協議会(FSC)や海洋管理協議会が、消費者に環境保全に配慮した製品であることを示す、ラベルを貼り、社会的な仕組みの周知、推進をしています。

私たちは次の世代に、地球の生物多様性と、そこから生み出される自然資源を残す使命を担っています。そのために何が必要なのかを、ぜひ一人ひとりが考えてみてください。



FSC Trademark © 1996 Forest Stewardship Council A.C.